

「午後になる前に」

奥村心

登場人物

真嶋奈央（6／18／30）	インテリアコーディネーター
田所正哉（18／27／30）	奈央の同級生・介護職員
真嶋由真（31／43／55）	奈央の叔母（育ての母）・書道家
真嶋充（14／26）	奈央の弟・会社員
故・真嶋愛（22）	奈央の亡き母（遺影）
三浦祐太（34）	奈央の彼氏・美容師
三上民生（25）	奈央の後輩
沢井慎之介（28）	新聞社社員
長瀬真実（35）	宇宙飛行士
長瀬健一（37）	真実の旦那
長瀬ミキ（6）	真実の娘
木戸栄子（18）	奈央の同級生
高杉未亜（18）	奈央の同級生
荒川恭一（18）	奈央の同級生
野村夫妻（27）	奈央の同級生
江口博之（27）	奈央の同級生
小西紀明（55）	奈央の高校の教頭
笹井美穂（24）	正哉の元婚約者
苫田亀三（88）	正哉の勤務する施設の入居者
奈央の取引先の社長	
奈央の取引先の担当者	

○東京モノレール（回想）

浜松町へ向かうモノレール、車窓から見えるのは都内の大きなビル群。その景色に魅了される真嶋奈央（18）。

○入学式会場・前（回想）

会場へ向かう新入生と保護者達。

○入学式会場・場内（回想）

学長が壇上で新入生を激励している。
無数の生徒の中、真剣な眼差しを向けている奈央。

字幕『2013』

○奈央の部屋

字幕『2024』

朝食を摂るスーツ姿の奈央（30）。
テレビから流れるのは、女性宇宙飛行士の長瀬さんがもうすぐ月から地球に帰ってくるというニュース。

アナウンサー「いよいよ宇宙飛行士・長瀬さんの帰還があと4日に迫っております。180日間の月での滞在を経て間もなく地球へと帰ってきますが、長瀬さんの活躍は現代の日本人女性にとっても、夢と自信を与える存在になっているのではないでしょうか、それでは一旦宇宙ステーションの長瀬さんにお繋ぎします。長瀬さん！」

中継先が宇宙ステーション内に変わり、長瀬真実（35）が画面に映る。

長瀬「はい、長瀬です。よろしくお願いしまーす」

満面の笑みで手を振る長瀬。
半分寝ている目でテレビの中の長瀬を見つめる奈央。

奈央「夢と自信ですかあ……」

〇とある駅前

行き来する人の波。

そんな駅前の賑わいから少し離れて電
話をしている奈央。

奈央「1時？1時。11時を1時にしてくれ
ってことね、はい、あと2時間。でも、ち
よつとそれ先に私に連絡をさあ、でも、ま
あ電車乗ってたから無理か……」

相手の声に耳を澄ませる奈央。

奈央「いや、そりやそうでしょ。相手都合な
んだから。いや、ノートはあるけどさ、ノ
ートあったところでだよ。もうデスクの仕
事は三上君に渡ってるんだからさ、あとは
現物見ないとわかんないでしょ。だってア
ニメ制作会社なんだよ？イメージできる？
できるわけないじゃない、アニメ制作会社
のインテリアコーデイナーなんて。いや、
めんどくさいなあ。ちよつと歩くよ、現場
まで歩く。なんかアイデア浮かぶかもしれ
ないし。とりあえずこの時間、昼休憩とプ
ラン作成ってことで、オーケー？」

奈央、周りに気を付けながら駅を離れるように歩きはじめる。

奈央「はい、お願いしまーす。終わったら連絡しまーす」

奈央、電話を切り歩きはじめる。
ブツブツ独り言を言いながら、通りは
ひと気が少なくなっていく。

タイトル『午後になる前に』

歩きながらスケジュールを確認してブツブツ文句を言っている奈央。

奈央「うーん、どうすっかな、2時、3時、
戻ってアイテム確認して、発注は明日にする
として、兼代さんに電話して、三上君で
大丈夫かなあ……」

○デザイン・リップルズ（回想）

パソコンでデータを入力している奈央。

ふと、考えてみる表情。隣のデスクに

は後輩の三上民生（25）。

奈央「三上君、これからけっこう仕事って振っていい？」

三上「はい、大丈夫です」

奈央「最近仕事早いもんね」

三上「（考え込んで）まあ、普通に」

奈央「あれ、田辺さんとの発注ロットのミスで、あれいつの話だったつけ？」

三上「ああ、5年経ってますね」

奈央「あら、もうそんなに」

三上「ですね、コロナより前の話ですから」

奈央「あ、そっか」

三上「はい。で、なんの仕事ですか？」

奈央「共有に入ってる三上君のフォルダに、新しくキッチン回りのアイテムフォルダ作るから、そこに予算とか発注先とかのいつもの管理お願いしていいかなと思って」

三上「わかりました。あっ、なんなら大丈夫でしたら、君島さんとの打ち合わせ俺やり

まずけど、今はもうほぼメモも見ることはないですし、まあ、君島さんとなら」

奈央「そっか、大丈夫か」

三上「はい、まずかったら報告しますから」

奈央「じゃあ頼もうかな」

三上「はい」

奈央「（笑って）いいね」

三上「（笑って）なにがっすか？」

○とある路地

奈央「大丈夫か、これからは三上君に任せるか……」

しばらく歩くと、自動販売機でコーヒ―を買おうとしている男性が目に入る。目を逸らそうとすると、僅かなタイミングで目が合う。

男性は田所正哉（30）。

正哉は奈央に気づいた様子だが、奈央は目を逸らしそのまま歩いていく。

奈央の後ろ姿を凝視する正哉。

早くその場を去ろうとする奈央。

追いかけはじめる正哉。

気配を感じる奈央。

足早になる正哉。

足早になる奈央。

正哉「（追いついて）ちょっといいですか？」

奈央「いや、よくないです」

正哉「ちよつと待ってもらえます？」

奈央「いや、待ちません」

正哉「待てますよね？」

奈央「いや、待てません」

正哉「待ったことありますよね？」

奈央「いや、待ったことはありません」

正哉「待たせたことはありますよね？」

奈央「待たせたこともねえつつってんだよ！

コノヤロー」

正哉「やっぱりシーマ！」

奈央「やめろよ、そのあだ名。お前なんでこ

こにいんだよ」

正哉「他人のフリはないだろー？」

奈央「うるさいなあ、忙しんだよ！平日だぞ
お前！これから打ち合わせなんだよ！何や
ってんだよこんなところで」

正哉「いやいやいや、シーマさあ、函館空港
で会った時、連絡するって言ってもう7年
も経ってんだぞ」

奈央「覚えてるかよ、んなもん。そもそもマ
サヤンの話なんて一度もちやんと覚えてた
ことなんかないんだよ」

正哉「変わらないなー、シーマのそうゆう腹
立つところ。全然変わらない！」

奈央「変わらないのはお前だからだっつーの。
マサヤンも私に腹立てるならさあ、その辺
で、その辺座って、その缶コーヒー開けて
黙って飲んでろよ」

正哉「いや、話したいこともあったんだよシ
ーマに。ずーっと」

奈央「なんだよ？無いよ、話すことなんて」

正哉「俺はあんだよ、ほらあれ」

○野村弘の結婚披露宴（回想）

盛大に祝福される新郎新婦・野村夫妻

（27）。

離れたテーブルに正哉（27）・江口

博之（27）ら同級生男子グループ。

正哉「結局シーマ来なかったなあ」

江口「来るわけないだろ」

正哉「だって高2の時、野村と2カ月間付き

合ってたんだよ？」

江口「余計来るわけないだろ」

正哉「俺だったら来るけどなあ。ちゃんと報

告しておかないとなあ、シーマに」

江口「お前、頭イカれてんなあ」

○とある路地

奈央「お前、マジで頭イカれてんなあ！」

正哉「そりや会ったら言うだろ」

奈央「会っても言わないだろ。少なくとも私

は言わない。なんで元カレの結婚披露宴の

話を今更聞かなきゃならないんだよ！てゆ

うか、なんでお前、私が高2の時、その新郎と付き合ってたのちゃんと覚えてんの？
こっちは名前も覚えてないっつーの！ 気持ち悪っ！」

正哉「大事にしろよ、思い出」

奈央「あ、そうだ。あれも思い出したお前」

○函館西高・廊下（回想）

慌てて走っている奈央（18）。

その先には荒川恭一（18）の胸ぐらを掴む正哉（18）がいる。

奈央「おい！ マサヤン！ なんか私の名前連呼してるって聞いたんだけど！ どうゆうことなん!!」

正哉「おう、恭一がシーマと付き合う気ないって言ってるからよう」

奈央「いや、私も付き合う気ねえし！」

正哉「なんでだよ」

奈央「好きじゃねえからだよ！」

正哉「好きだって聞いてたぞ！ 噂でよう！」

奈央「噂!!」

正哉「おう！火のないところに煙は立たない
って言うだろ！」

奈央「コイツ、マジで頭イカれてんなあ！」

○とある路地

奈央「あん時、お前どんな気持ちだったの？」

正哉「いや、あれは、良かれと思って、あれ？好きだったんじゃないかなかったつけ？いや、みんな言ってたよね。シーマが恭一のこと好きだって」

奈央「言ってたとか関係ねえし。私は言った覚えねえし。そもそも好きじゃなかったし。ただの生徒会長と副会長の関係ってだけだったし！」

正哉「そうだそうだ、そうだった。同じ怒られ方した、今と同じ。ごめんごめん」

奈央「疲れる。しかも成長してないコイツ」

正哉「そんなに言わんでも、でもそうだ、シ
ーマそんなときも言わなかったよな、ホント
に好きな人のこと。で、誰だったの？」

奈央「めんどくさ、まだそんなこと言ってん
の？もう恥ずかしいな」

正哉「いいじゃん今なら、今ならいいじゃん」

奈央「言いません」

正哉「言えない感じの人？」

奈央「言いたくないだけです」

正哉「今でも好きとか？」

奈央「しつこいなあ。そうゆうところ！声かけ
られても無視したくなるのそうゆうところ！」

正哉「はい、やめまーす」

奈央「ホントな、お前」

正哉「久しぶりなんだからさ、そんなにカリ
カリすんなよ」

奈央「むしろお前が気をつけろよ」

正哉「やっぱりシーマ変わってないなあ」

奈央「いやいや、関係性が変わってないんだ
から態度も変わるわけないだろ」

正哉「なんか難しいこと言うな」

奈央「なにがだよ」

○真嶋家・アトリエ兼リビング（回想）

真嶋由真（４３）が大きな半紙に書を

揮毫している、真剣な表情。

離れたところでその姿に見入っている

奈央。玄関のチャイムが鳴る。

奈央「出てくる」

○同・玄関（回想）

奈央が玄関を開けると、沢井慎之介

（２８）が顔を見せる。

沢井「お世話になっております。道南新聞の

沢井です」

奈央「ああ、どうも、います」

沢井「奈央ちゃん、おじやまして大丈夫？」

奈央「入るのは大丈夫ですけど、ちょっと作

業しているので、タイミング見て」

沢井「あっ、はい、おじやまします」

家にかかる沢井。

○同・居間（回想）

沢井「先生、おじゃまします」

気が付かない由真。

状況を理解する沢井。

奈央「今日は何作品ですか？」

沢井「18作品だね」

奈央「見ていいですか？」

沢井「いいよ」

沢井、少し大きめのファイルから多数
の書道作品を取り出す。

奈央「皆さん、お上手ですね」

沢井「すごいよねえ、気を付けてね」

作品を奈央に渡す。

奈央「沢井さんは書道は得意ですか？」

沢井「苦手だな。昔からなんにもできないよ」

奈央「文章得意じゃないですか。私、沢井さ

んの文章、丁寧で好きですよ」

沢井「まあ、仕事だからね。でも少し嬉しい」

奈央「もっと喜んでくださいよ」

沢井「さすがに先生の前では」

由真「奈央は見ないの、はい、沢井さん持つてきて」

沢井「あつ、すいません。奈央ちゃんごめん」

沢井、奈央の手から作品を取り、由真のもとへ急ぐ。

沢井「先生すみません、今回は18作品です」
由真「ありがとうございます」

沢井をただ目で追うだけの奈央。

○とある路地

少し思い出に浸る奈央。

正哉「やっぱり俺って変わってないよなあ、
はあ、ちよつと落ち込んだ」

奈央「ホントだよ」

正哉「昨日もさ、夜、大根切ってたんだよ、
大根」

奈央「その話長いの？」

正哉「長芋？」

奈央「あ、いいや」

正哉「それでさ、その長芋を切ってたらさ、
その長芋を何に使おうとしてたかわからな
くなってたのよ」

コイツ大丈夫か？という目で正哉を見
る奈央。

正哉「なんだよ」

奈央「いや」

正哉「おう。そんでな、その大根を一旦まな
板に置いて、風呂を沸かすことにしたのよ」

奈央「その話長いの？」

正哉「長芋？」

奈央「いや、どうぞ」

正哉「で、風呂を沸かしているうちにすぐ風
呂に入りたくなったのよ」

奈央「おう」

正哉「でな、体をゆっくり洗ってな、ほら、
俺、体ゆっくり洗う人間だろ？」

奈央「おう」

正哉「お湯が丁度溜まるくらいに体を洗い終えたのよ」

奈央「おう」

正哉「すぐくね？」

奈央「なにが？」

正哉「いや、なにがって言われても」

何を話しているかよくわからなくなる

二人。

奈央「あれ？てゆうか、マサヤン結婚するとかの話あつたよね？聞いた、聞いてたよ。

同窓会断るとき聞いた。あれ？函館帰るんじゃないかったの？家継ぐとか何とかで。なにやってんのここで？」

正哉「え？なにその話？」

奈央「トボけんなよ、お前の話だよ、説明しろよ」

○とある公園（回想）

婚約者・笹井美穂（24）と語り合う

正哉。

正哉「函館はいいところさ、お刺身は美味しい、カニは美味しい、寿司も美味しい！カニも美味しい！」

美穂「うわぁ」

正哉「もうすぐ専務になって、常務になって、社長になるから、俺と結婚しよう」

美穂「うわぁ」

○正哉の家（回想）

正哉「どうゆうことだよ、従弟のサトルが社長に？でも他の取締役があるだろ？あつ、切れた」

無の表情で正哉を睨む美穂。

○とある路地

奈央「でしようね」

正哉「でしようねってなんだよ」

奈央「で、今はどうなの？」

正哉「それがさぁ、天職なのよ。今、天職が見つかったって感じ」

奈央「おう、良かったじゃん」

正哉「聞きたいでしょ？」

奈央「聞きたくはない」

正哉「聞けよ」

奈央「聞きたいでしょ？って聞かれたから聞きたくないって答えたただけだろ!! 何言ってるんだよお前!!」

正哉「話つてのは聞くためにあるんだよ」

奈央「あれ？私何やってんだろ。ここでコイツと、何やってんだろ」

正哉「まあ、聞けよ、最初から」

○老人ホーム（回想）

職員として笑顔で苦田亀三（88）の

車いすを押す正哉。

○とある路地

奈央「いや、もういいもういいもういい。聞きたくない」

正哉「聞けよ、もう少しよう」

奈央「いいよ、もうお前が笑顔で爺さん押し
てるイメージ映像で十分なんだよ。何があ
るんだよ、それ以上」

正哉「こないださあ、お爺さんの恋愛話聞いて
さあ、入居者内恋愛ってやつ」

奈央「あれ、何それ、ちよっと面白そう」

○老人ホーム・亀三の部屋

亀三と談笑する正哉。

○とある路地

奈央「テメエ、ただの下ネタじゃねえかよ！」

正哉「男はいつまでたっても元気だよねえ」

奈央「すげえな、88歳」

正哉「で、シーマ何やってんの？」

奈央「なんだっていいだよ」

正哉「とか言って知ってんだよねえ、フエイ
スブック見てたから」

奈央「（苦い顔で）ああ、あれか。消してな
かったなあ、あれ」

正哉「なんでだよ」

奈央「6年前くらいから、何にも更新してないもん、なにげに実名だからヤバそうだし」

正哉「俺バリバリ使ってるけどな」

奈央「使ってるのかよ」

正哉「最後にシーマがあげてた写真、今でも覚えてるわ」

奈央「だから気持ち悪いんだよ」

正哉「なんか、オシャレな会社の事務所でさ

あ、インテリアのコーディネート完成とか
言って」

奈央「ああ、懐かしいな」

正哉「嬉しそうな顔だったよ」

奈央「そこも潰れちゃったけどね」

正哉「ふーん、そうなんだ」

〇とある会社の事務所（回想）

嬉しそうにインテリアの配置を決めている奈央。スタッフもクライアントも笑顔が溢れている。

奈央「写真撮ってもいいですか？」

相手の社長「ああもう、全然お願いします」

奈央「フェイスブックにあげますね」

相手の社長「どうぞどうぞ」

写真を撮る奈央。皆、嬉しそうな顔で

カメラにポーズを取っている。

事務所内は奈央がコーディネートした

インテリアで彩られている。

〇とある路地

正哉「いろいろあるもんなあ」

奈央「いろいろあるもんなで済ませんなよ」

正哉「にしてもだよ、にしてもだよ、シーマ、

性格変わらなすぎじゃね？いい意味で」

奈央「悪い意味だろ」

正哉「お母さん元気なの？」

奈央「なに急に」

正哉「いや、今函館で一人なんじゃないの？」

奈央「あの人是一人でも大丈夫なの」

正哉「そうかなあ」

奈央「自分の心配しなよ」

正哉「ウチはもう、勘当されたようなもんだから」

奈央「そっか」

正哉「ほら、お前が高3の時、自分ちの家の説明をしたことあったじゃない、紙一枚で」

奈央「ああ、あったね」

正哉「あれが強烈すぎてさ」

奈央「めんどくさかったのよ、あの時期。あらぬ想像されたり噂されたり、知ってる人ならまだしも」

○教室（回想）

ひと気も少なくなった放課後。帰り際の奈央、正哉、木戸栄子（18）、高杉未亜（18）らの男女グループ。

栄子「そろそろ帰る？」

未亜「そうだね、どっか寄ってく？」

奈央「あっ、みんなちよつといい？」

未亜「どした？」

全員、奈央に注目する。

奈央「いや、なんか一応言つといたほうがいいのかなあつて思つて、ウチの家族のこと、紙に書いてきたんだけど」

栄子「ん？」

奈央「いや、ほら、ウチのお父さんのことで、なんか、みんなにも気を使わせてるし、ウチの家族ちよつと複雑だからさあ、変な噂も立ってるし、まあ、噂じゃないか。事実か。とりあえず、みんなにはウチの家族の關係、知つといてほしいなあつと思つて」

奈央、バッグから一枚の紙を取り出し、目の前の机に置く。

奈央「ウチねえ、お母さんがホントは伯母さんなのよ。ホントのお母さんは私を産んでくれて、そのあとすぐ死んじゃつて。で、伯母さんが引き取ってくれて、お母さんになつてくれたの、まあ、最近知つただけだね。で、お父さんは他人、強いて言えば叔父さんか。で、弟はお父さんとお母さん

の子だから、ホントは私の従弟。まあ、これでも最近知ったんだけどね。まあ、ウチはそうゆうややこしい家庭です」

皆、黙って奈央の書いた家族の相関図を見つめている。

奈央「あつ、で、これはついでです」

指を指した先には、父親から矢印で

『不倫相手 元2年担任・柏田』と書かれている。

〇とある路地

正哉「あの時、大変だったよな」

奈央「大変だった」

正哉「すげー心配だった」

奈央「そうだ、マサヤン、ウチのお父さんの

お葬式、お通夜も来てくれたよね」

正哉「うん」

奈央「すごい雨だったよね」

正哉「うん、そうだった」

奈央「あれ、なんで来てくれたの？」

正哉「だから心配だったんだって」

奈央「それって何？どうゆう意味で？」

正哉「いや、まあ、好きだったとかなのかは、
忘れたんだけど」

奈央「ウソつけよ。アンタは私に惚れてたよね。恥ずかしいくらい」

正哉「高校生の好きなんて好きの内に入らないからな」

奈央「んなことないでしょ」

正哉「あ、思い出した」

○函館西高・廊下（回想）

学校中がザワザワしている。

男子A「勘弁してくれよ、校長が万引きだなんてさあ」

女子A「いや、朝も来るとき恥ずかしかったよ、マジで」

男子B「ホント、世間の目感じたわ」

男子A「めんどくせえなあ？どうせ謝罪かなんかの集会だろ？」

ザワザワする中、怒りと呆れを抑える表情で歩く奈央。

○同・体育館（回想）

壇上に教頭の小西紀明（55）があがり生徒達がザワつく中、集会が行われている。

教頭「皆さん、今、警察が事実関係を確認しております。憶測は避けて、生徒の皆さんは普段の生活を送る努力を続けてください」

ザワつきが大きくなる生徒達。

男子C「なんでこっちが努力するんだよ」

男子D「いちいち偉そうなんだよなあ、状況分かれよ」

女子B「とりあえず謝れっつーの」

教頭「言いたいことはもちろんたくさんあると思いますが、まだはつきりしてないことが多いので、また、具体的なことがわかり次第、各担任から連絡いたします。保護者の方にも、状況が説明できるようになった

ら、早急にこちらからご連絡しますので、
本日は以上です」

「えー？」といった生徒たちの態度。

男子C「万引き犯はいつ出てくるんだよ！」

男子D「とりあえず謝罪だろうがよ！」

教頭「口を慎みなさい！まだ確認中です！」

女子B「万引きに確認中なんてあるかよ」

ザワつく状況の中、奈央が颯爽と壇上
へ向かう。

生徒、教員達の視線は奈央に集まる。

教頭「生徒会長？こんな流れだったっけ？」

戸惑う教頭。壇上に上がる奈央。

奈央「教頭先生、誠にありがとうございます
た」

奈央、深く一礼をする。

奈央「あとは私のほうでなんとかいたします
ので降壇のほうをお願いいたします」

と、身振りで教頭を退けさせる。

教頭、困惑し教員達と目くばせをする。
なんとなくしようになく降壇する教頭。

奈央「ええ、生徒会長の真嶋奈央です。言いたいことがあって勝手に壇上に上がりました」

「ええ!!」とザワつく生徒、教員達。

奈央「あの、これだけは言いたいんですけど、もうザワザワするのやめませんか？もうめんどくさいんですよ。そう思いませんか？自分達がやったことでもないのに、コソコソ噂されて、白い目で見られて、それに反応するのがもういい加減めんどくさいんですよ。だから皆さん、無視しましょうよ！」

首をかしげたりぶつぶつ話をはじめる生徒達。

奈央を見つめる正哉、栄子、未亜らの友達グループ。

奈央「関係ないで通しませんか？皆さん関係ないですよ？校長が万引きしてようがしてなかりうが、担任が自分の親と不倫してようが、私には一切関係ないですよ！そんなことでいちいちザワザワするこの町が、

函館というこの町が、私はもうだいつ嫌いなんですよ！」

バーン！と思いつき両手で教壇を叩

く奈央。鎮まる体育館。

口が開いた状態の生徒、教員達。

男子C「最後のほう万引きと関係なくね？」

奈央「ということです。すみません、なんか心臓が痛くなってきたので、ここで保健室行きます。皆さん、穏やかに普段の生活を送ってください。生徒会長よりお願いいたします」

奈央、一礼し降壇、颯爽と体育館を去る。

○ 同・保健室前廊下（回想）

心配そうに保健室に入ろうとする正哉。少しドアを開けたところでカーテンの向こうを見つめはじめる。

泣き出す奈央の声が徐々に大きくなつていく。

うわんうわん泣き出す声を聞き、静かにドアを閉め、廊下に立ち尽くす正哉。

○とある路地

奈央「なにあれ、アンタ見てたの？」

正哉「見てはないよ」

奈央「いたんでしょ」

正哉「だから心配だったんだって」

奈央「なんでだよ」

正哉「なんでだよって、自分だってわかってんだろ？」

奈央「だとしても、何であんたがそんなこと考えんのよ」

正哉「すいませんでした」

奈央「でもそうだ」

正哉「：：」

奈央「本当はずっと言いたかったんだ」

正哉「何を？」

奈央「ありがとうって言っとくよ」

正哉「おっ、伝わった」

奈央「でもね、そのあと急にお父さん死んだ
でしょ。みんなホントに心配してくれたけ
ど、実はそんなに落ち込んでなかったんだ、
あのお通夜の夜も。まあ、それは、お父さ
んが実の父親じゃなかったからってことじ
やなくてさ、むしろ私たち兄弟はすごく優
しくしてもらってたし、感謝してたし。で
も、あの夜のこと、はっきり覚えてる」

○真嶋家（回想・夜）

お通夜の準備が整っている居間の様子。
外の大きな雨も部屋まで聞こえてくる。
弟・充（14）は少しふてくされてテ
レビを見ている。

由真は落ち着いた表情で生命保険の資
料や旦那名義の通帳、手帳などを見
ながら段取りをノートに記している。

奈央が玄関のほうから現れる。

奈央「お母さん、お坊さん来た」

由真「ありがとう」

奈央（N）「お父さんが亡くなったことより
さあ、あの時のお母さんの凜とした姿が、
ずっと今でも目に焼き付いてる」

僧侶と打ち合わせをしている由真。

なんとなく話を聞いている奈央。

奈央（N）「それまで、みんな仲がおかしかったし、いやまあ、私がおかしくさせてたんだと思うけど。なんか全部、グチャグチャだったよね。だから、お父さんのお通夜もお葬式も、もう絶対うまくいかないと思ってたの」

肅々と進んでいく通夜。和成の友人知人らが由真に挨拶をしていく。

× × ×

お経を読む僧侶。

× × ×

由真が最後の挨拶をしようとしている。

由真「今日は、皆様ご多忙中にもかかわらず、
真嶋和成の通夜にあたりまして多数の心か
らのご会葬を頂き、誠にありがとうございます

ました。私が主人に出会ったのは海でした。函館には似つかわしくない色黒のいけ好かないサーファー野郎でした。でも、その夏私は主人に恋をしました。モテる男だったので、その後のことは皆さんもご存知のとおりだったと思います。でも、子ども達を一所懸命愛してくれました。そんな好き勝手に生きている主人が好きでした。憎たらしくて喧嘩ばかりでしたが、同じ時間を生きてきました。彼が私をどう思っていたかはわかりません。でもまあ、すべて過去のことになってしまいました。皆様にも大変ご迷惑をかけたと思います。そして、皆様からたくさん愛情を頂き天国かどうかはわかりませんが、この場所を旅立てたことを故人に代わって深く感謝申し上げます」

深い挨拶をする由真。

その姿に心を奪われる奈央。

遠くから見つめる正哉。

由真「簡単ではございますが、これを持ちましてお礼の挨拶にかえさせていただきます。明日の葬儀もどうかよろしくお願いします」

○とある路上

奈央「でも忘れてたよ。アンタにこうして会うまで、ずっとお母さんのこと忘れえてた」

正哉「連絡はこないの？」

奈央「弟からたまにLINEで」

正哉「そっか」

奈央「結局私にとってはお母さんでも、あの人にとっては姪っ子なのよ」

正哉「んなことないだろ」

奈央「んなことあるのよ」

正哉「：：」

奈央「んなことがあったのよ」

○真嶋家・居間（回想）

奈央「お母さん、私、東京の工科大学受けたんだけど、学校案内見てくれる？」

由真「うん」

奈央「聞いてる？」

由真「うん、学校案内ね」

奈央「ならいいけど」

由真「お母さんにも報告しなさいよ」

奈央「：：」

由真「最近お墓参り行っていないでしょ」

奈央「いや、だって共同墓地だもん、そんな
ウチで拝むのと変わらないでしょ、仏壇と」

由真「あなたを産んだお母さんだよ。大事な
ことだから行ってきたさい」

奈央「いや、お母さんとは姉妹かもしれない
けど、私は会った記憶が無いのよ」

由真「加奈ちゃんの写真も、加奈ちゃんが好
きだった場所に連れて行ったことも、全部
意味が無かったって言うの？想像とかでき
ないの!!」

奈央「できないよ、意味が無いとは思わない
けど。難しいよ」

由真「いい、いい。わかんないなら言ってもしょうがない」

奈央「無理だよ、お母さんと思ってない人をお母さんとは思えない」

由真「私はあなたを産んでないの！」

奈央「……」

由真「わかるよね!!」

奈央「なんでそんなこと言うのよ？」

由真「ずっと苦しいのよ、加奈ちゃんが死んで、代わりにあなたを育てることがすごい苦しいのよ」

奈央「……」

由真「なんで私が生きてるんだろ……」

奈央「わかったよ。だったら私の東京行はお互い都合がいいんだからさ、ウインウインということで進学させてください」

由真「……」

奈央「ちよっと自転車で本屋行ってくる」

○とある路地（回想・夜）

自転車を走らせる奈央。

〇とある路地

奈央「もう12年かぁ」

正哉「お母さんは謝ってきたの？シーマに」

奈央「なんで？」

正哉「あなたを産んでないとか言ったことを」

奈央「だからなんで？」

正哉「いや、なんでって、自分で言ったんじ

ゃん。なんでそうゆうこと言うのって」

奈央「えっ？」

正哉「言っていないの？お母さんがシーマを産

んでないって言ったとき、『なんでそんな

こと言うの？』って言ったんじやなかった

っけ」

奈央「いや、言った」

正哉「でしょ？そのことを謝ったのになって」

奈央「謝ったもらってはない」

正哉「いいの？それで」

奈央「まあ、産んでないから産んでないって
言ったんだろうし、苦しいから苦しいって
言ったんだろうし。そりゃそうだと思うよ」

正哉「そっか、お母さんの気持ちわかったんだ」

奈央「まあ、そうだね、わかったんだね」

正哉「成長だなあ」

奈央「アンタが成長しなさすぎなんですよ」

正哉「そうゆうことでもないと思うんだよな」

奈央「そうか？」

正哉「お母さんだってさあ、実のいもう……」

奈央「うるさいな！アンタが話まとめるんじゃないよ!!」

正哉「やめまーす」

× × ×

奈央「アンタ、タフなんだね」

正哉「結構歩くんだよ、介護って」

奈央「ふーん」

正哉「疲れた？」

奈央「まあ」

正哉「公園あるから休もうよ」

奈央「まあ、そうね」

○公園

奈央と正哉が入り口を通ってくる。

奥のほうでは父親の長瀬健一（37）

と娘の長瀬ミキ（6）がシャボン玉で遊んでいる。奈央と正哉がベンチを見つけて腰を掛ける。

奈央「これからどうするの？」

正哉「ずっと東京かな、天職だし」

奈央「ふーん」

正哉「なんか疲れてない？」

奈央「だから疲れたって言ったじゃない」

正哉「そうじゃなくて、なんか日々疲れて
いる感じ、昔みたいに目力が無くなってる」

奈央「さっきはシーマ変わってないとか言っ
てたくせに」

正哉「口は変わってないけど、なんか目は変
わったよ、疲れてる」

奈央「やめろよ」

正哉「だってそう見えるんだもん」

奈央「老化だよ老化」

正哉「たかだかまだ三十だろ」

シャボン玉で遊ぶ健一とミキ。

つい見とれる奈央と正哉。

奈央「可愛いね」

正哉「いいねえ」

奈央「マサヤンも子供とか欲しいの？」

正哉「おっ、まあ、できればね」

奈央「娘だったら心配事増えるね」

正哉「やっぱり、それでも娘がいいな」

奈央「息子だって可愛いでしょ」

正哉「まあな、でも、俺が可愛くない息子だ

ったからな」

奈央「そんなことないって言いたいけど、ま

あ、それはマサヤンが自分でなんとかしな

いとね」

正哉「お前に言われたかないよ」

奈央「そりやそうか」

思わず笑い合う二人

正哉「親子って難しいよな」

奈央「あとどのくらい会うことができるんだ
ろうね」

健一が大きなシャボン玉を作る。

ミキ「パパ大きい！」

健一「大きいなあ」

ミキ「お空に上がっていかないかなあ」

健一「さすがにお空は難しいなあ」

ミキ「ママのいるお空に届かないかなあ」

健一「届けばいいなあ」

空に向かってシャボン玉を作る二人。

ミキを見つめる奈央。動揺しているが
強ばった顔が元に戻せない。

楽しそうにシャボン玉を作るミキ。

涙が溢れてくる奈央。

○真嶋家（回想）

仏壇に真嶋愛（22）の遺影が飾られて
いる。

奈央（6）「お母さん、この人だーれ？」

由真（31）「私の妹よ、愛って言うの」

奈央「愛ちゃん」

由真「そうだ、愛ちゃんだね」

奈央「愛ちゃんはどこにいるの？」

由真「遠いところ、お空の上かなあ」

奈央「もう会えないの？」

由真「一度行くと会えないんだあ」

奈央「なんでそんなところ行ったの？」

由真「なんでだろうね」

奈央「お母さんはそんなところ行かないでね」

由真「そうだね、でもね、生きてる人は、そ

こに必ず行くの。みんな、私も、奈央も」

奈央「やだ、怖いよ」

不安で泣き出す奈央。

思わず抱きしめる由真。

由真「大丈夫大丈夫、すぐじゃないから、今

じゃないから、ごめんごめん、大丈夫だよ」

奈央が泣き止むようのだめる由真。

○公園

手をつないで帰っていく父娘。

涙が止まらない奈央。

それでも涙が止まらない奈央に、正哉がハンカチを取り出す。

呆然と正哉と目を合わせる奈央。

奈央「あつ、ああ、ありがとう」

正哉「大丈夫大丈夫」

× × ×

奈央「じゃあ、仕事行くわ」

正哉「ご飯は？まだ時間大丈夫でしょ？一緒に
行こうよ」

奈央「ああー、いや、ちょっと一人にな
りたい」

正哉「ちょっと心配だなあ」

奈央「うん、大丈夫、ありがと」

正哉「オーケー、じゃあ、そのうち連絡ちょ
うだいよ」

奈央「なんで？」

正哉「えっ？」

奈央「えっ？」

正哉「えっ？」

奈央「えっ？」

正哉「えっ？」

奈央「えっ？」

正哉「えっ？なんで連絡ダメなの？」

奈央「なんでって、やだよ連絡なんて」

正哉「なんでだよ」

奈央「逆になんでだよ！もうマサヤンで今日

お腹いっぱいだよ」

正哉「ええ、今日結構俺とシーマ距離縮まつ

たと思ったよ？」

奈央「縮まってはねえよ！なに勝手なこと言
ってんだよ。あっ！えっ？まさか？今の公

園のなんかアレで、なんか感傷的になっち

やって？変な、変な感じに、お前、何考え

てんの？いや、それとこれとは話別だよ？」

正哉「えー？なんでだよー。お前子供が欲

しいとかさあ、家族がなんとかとかさあ、

ちよつと俺、シーマとは今後アリかなとか

思ったっちゃったよ？でゆうかさあ、マジで、俺、シーマと、結婚とかさあ……」

奈央「えっ？」

正哉「えっ？」

正哉「えっ？」

奈央「えっ？」

奈央「えー？」

正哉「えー？」

奈央「でゆうか、なんでお前が『えー？』って言うんだよ！」

正哉「いいだろうがよ！」

奈央「こっわ！」

正哉「なにがだよ」

奈央「マジ？えっ？まさかお前？この一時間くらいで、えー？そんな感じで一緒に歩いてたの？コイツこっわ！」

正哉「えー？」

奈央「だからなんで『えー』なんだよ！てゆうか、彼氏いるからね私」

正哉「あれ？そうだったけ？」

奈央「（笑って）いや、そうだっけ？って今初めて言ったんだけど。てゆうか、そうゆう話にならなかったよね」

正哉「フラれた」

奈央「いや、フツてねえし」

正哉「傷ついた」

奈央「知らねえし」

正哉「：：」

奈央「じゃあ、行くからな」

正哉「おう」

奈央「気をつけろよ」

正哉「おう」

奈央「人生丸ごと気をつけろよ」

正哉「おう」

奈央「天職、頑張れよ！」

正哉「お前も、仕事頑張れよ！」

奈央「おう」

正哉「じゃあな」

奈央「じゃあな」

手を振り別れる二人。

奈央「やあ、すごい疲れた」

ぐったりした顔で歩きはじめる奈央。

○クライアント先

担当者「真嶋さん、ホントにすいませんでした、こちらの都合で」

奈央「いえ、まあ、ある意味、すごい助かりました」

担当者「あつ、そうなんですか？」

奈央「そうなんですよ」

担当者「あつ、お気遣いありがとうございます。すいません、今後は早めにご連絡いたしますので」

奈央「あつ、はい、今後ともよろしく願います。とりあえず、会社さんの中を見せていただければ」

担当者「ああ、すいませんすいません。それではご案内しますので」

担当者に案内される奈央。

○美容院（夜）

誰もいない中、掃除をしている三浦祐

太（34）。

着信したスマホを見て入口へ向かう。

笑顔で立ってる奈央。

祐太もそれを見て笑みをこぼす。

× × ×

奈央「いや、最悪だった。なんか勘違いしてさ。プロポーズしてきたの」

祐太「（笑って）こっわ」

奈央「でも、いい奴はいい奴なんだよ。高校んときお父さんのお葬式に同級生で唯一来てくれた奴だし、ただまあ、思い込みがすごくてね」

祐太「だからってプロポーズはダメだよ」

奈央「でも思ったの私、祐太と函館住みたい」

祐太「いいよ」

奈央「あのね、それは」

祐太「うん、結婚してください」

奈央「うわ、本日2回目のプロポーズ」

祐太「（笑って）なんかごめん」

奈央「小さな街だよ」

祐太「奈央がいればどこも一緒」

奈央、泣きながら祐太に抱きつく。

奈央「結婚してください」

笑顔で奈央の背中をさする祐太。

○ 埠頭にあるベンチ

ベンチに座る奈央。

そこに現れる充（26）

充「お待たせ」

奈央「おう、まあ座ってよ」

充「まあ、LINEとか電話でよくない？」

奈央「お前さあ、もう私たちなかなか会えないぞ？」

いぞ？」

充「そんなもんでしょ、特に函館の人間なんて、消えては戻って消えては戻って」

奈央「お前もな」

充「まあね」

奈央「そして、私も」

充「うん」

ただ海を眺める二人。

充「昔の話でもする？」

奈央「しないよ」

充「前にいっぱいしたか」

奈央「あん時は充がガーガー荒れて、あれは

もうコリゴリだよ」

充「あの状況でああならないやつの方が異

常だよ」

奈央「まあね」

充「姉ちゃんは今もっと早く知っておきたかつ

た？本当のこと」

奈央「どうだろ。今になってはね、どっちで

もいいよな」

充「でも頑張ったよな、俺たち」

奈央「頑張った」

充「それだけで、強く繋がってるんじゃない

い？真嶋家は」

奈央「まあ、そうだね」

○奈央の部屋

“お母さん”と表示された番号を押す

奈央。

奈央「もしもし、お母さん」

○真嶋家

スマホを耳に当てる由真（55）。

由真「はいはい」

奈央「結構大事なお話があります」

由真「はい」

奈央「大丈夫、今？」

由真「大丈夫よ」

奈央「えーっと、まず、わたくし、来年の今

頃、結婚します」

由真「それはおめでとう」

奈央「で、生活を、函館に変えようかと思う

んですけど、どうでしょうか？」

由真「あなたが？」

奈央「はい」

由真「またどっか行きたいってなるんじゃないの？」

奈央「いや、今のところは大丈夫かと」

由真「（笑って）あっ、そうなんだ」

奈央「はい」

由真「ふーん、そうですか」

奈央「やつぱり、まだ信頼されてない？」

由真「別にあなたは信頼されてなくても特段

関係ないタイプでしょ」

奈央「いや、今はそうでもないよ、もう30

だし」

由真「新しい部屋、借りるの？」

奈央「そうね、旦那になる人が美容師だから、
そっちで美容室開きたいなあと。それまでは
どこか借りるかな」

由真「旦那さんは、北海道の人なの？」

奈央「いや、仙台、でも函館は好きよ」

由真「そっか。うん。まあ、だったらさあ、
ウチ、リフォームしてここ住めばいいんじゃない

やない？お互いお金が浮くし、困ったとき
助かるし」

奈央「え？」

由真「リフォームしようと思ってたの、でも
一人だったから決断できなくてね。奈央が
戻ってくるならなにかと丁度いいから。一
流のインテリアコーディネーターなら安心
して頼めそうだし。いいよね？」

奈央「うん、ありがとう。お願いします」

由真「はい、結婚おめでとう」

嬉しそうな奈央。

嬉しそうな由真。

由真「で、一度帰ってくるんでしょ？」

奈央「うん、紹介する」

○東京モノレール

羽田空港へ向かうモノレール。

車窓から見える大きなビルの群。

スマホを操作する祐太を横に、穏やか
な表情で外を見つめる奈央。

○共同墓地

お墓参りにきた由真、奈央、祐太。

目を閉じて共同墓地に手を合わせる。

由真「どんくらいぶり？」

奈央「実はたまに来てた」

由真「そうなの？ ひどい、ウチも寄らないで」

奈央「ごめんごめん、祐太も一緒だったし」

由真「別に寄ったっていいじゃない」

奈央「すみません。ちゃんとこれからは親孝

行しますから」

しょうがないという顔をする由真。

○老人ホーム

お爺さんを嬉しそうに介護する正哉。

○デザイン・リップルズ

コーヒーを手にデスクに座る三上。

いつも通りの雰囲気で入力をはじめめる。

○函館西高前の道

しゃがんで坂の下の景色を見つめている奈央と祐太。

祐太「なにげにこの辺初めてじゃない？奈央の学校とか、近くの教会とか」

奈央「そうだっけ？」

祐太「トボケちゃって」

奈央「バレた」

祐太「ここ来るの嫌だったの？」

奈央「そうね、避けてた。函館の景色はさあ、嫌でも目に焼き付いてしまうから」

二人の見つめる先には埠頭。

○カトリック教会・外観

奈央（N）「学校帰りの思い出だったり」

○二十間坂

奈央（N）「今じゃ会わなくなった友達との思い出だったり」

○赤レンガ倉庫

奈央（N）「なんで付き合ったかも覚えてない恋愛だったり」

○大森海岸

奈央（N）「なんで落ち込んだかも覚えてない悩みだったり」

○真嶋家・外観

奈央（N）「なんでぶつかったかも覚えてない家族のケンカだったり」

○函館西高前の道

奈央「函館に置いていこうとするんだけど」
黙って奈央を見つめる祐太。

奈央「この目に焼き付いた景色が、どこに行っても付いてくるの」

祐太「ダメなの？」

奈央「辛かった」

祐太「ふーん、そっか」

奈央「あの時の生徒会長はもうどこにもいない。ここから逃げようとしたんだけど。ダメだったわ。でももう大丈夫。一人じゃないし、いろいろ経験したからね」

祐太「そうだね」

黙って坂の向こうを見つめる二人。

○真嶋家・居間

リフォーム完成間近の居間、一部、美容院となっている。

家具を配置する奈央。

セットチェアに座っている由真。

由真の髪質をチェックする祐太。

祐太「どれくらいにしますか」

由真「おまかせできる？カラーも含めて」

祐太「おっと、わかりました」

由真「T i k T o kのバズりスタイリストみ

たいな仕上がりで」

祐太「（笑って）T i k T o k見るんですか？」

由真「見る見る、こうゆう美容系、大変身系、大好き」

祐太「うわプレッシャー、大変身させないと」
由真「よろしく」

リビングに流れているテレビの中で女性宇宙飛行士・長瀬真実の日本到着の中継が行われている。

○飛行場

宇宙飛行士の到着を待つスタッフやテレビ中継や家族、関係者たち。

アナウンサー「間もなく女性宇宙飛行士・長瀬さんがあの乗降口からその姿を見せる予定です」

乗降口が開き、真実が手を振りながら笑顔で現れる。

拍手喝采に包まれる会場。

アナウンサー「およそ180日ぶりにご家族との再会を果たすことになります。タラップの下では旦那さんと愛娘のミキちゃんが

嬉しそうに長瀬さんとの再会を心待ちにしております」

嬉しそうに待つ家族を見つけ、タラップを降りはじめる長瀬。そこには公園で奈央が見かけた健一とミキが待っている。娘ミキと抱き合う真実。その姿がテレビで中継されている。

○真嶋家

テレビに釘付けの奈央。

○公園（回想）

空を見上げる健一とミキ。

○真嶋家

画面の母娘を見つめながら「ああ、あの時の子」と納得し安心して微笑む奈央、そのまま嬉しそうに作業を続ける。その奥で、由真のカットを続ける祐太。

おわり